

内
山
愚
童



内山愚童
（第一回至第十回）

大逆事件のイデオログ

蚕の社 編
柏木隆 法



内山愚童
(唯一現存する写真)

内山愚童

大正十一年三月十日

内山愚童



内山愚童
(第一組のメンバー)

大逆事件と内山愚童

大逆事件とは工員、宮下太吉が天皇を爆殺しようとしていたことが発覚し、明治政府は社会主義者、無政府主義者の一掃の口実となった事件である。幸徳秋水以下二六名の逮捕者を出して幕とったが、この事件は宥罪に概当する類のものではなかった。確かに幸徳や大石誠之助に遠因はあったにせよ、こと「大逆」に関する限り無実であった。十二名の死刑囚のうち、曹洞宗僧侶、内山愚童の名を記憶にとどめている方は少ないであろう、しかし彼こそ「大逆」のイデオログであった。

明治四十一年六月神田の錦輝館において、山口孤剣の出獄歓迎会が催された。その散会の直後、場外の群衆のなかに二旗の「無政府共産」と書かれた赤旗がひるがえった。いわゆる（赤旗事件）である。明治政府はたわいもないこの事件を最大限利用して大杉栄、菅野須賀子、堺利彦、山川均ら十四名を検挙して社会主義、無政府主義者を弾圧した。当時、内山愚童は箱根大平台林泉寺の住職であり、幸徳や石川三四郎と親交をもつ「週間平民新聞」の読者であった。愚童が平隠な今までの立場を変え、天皇制の恐怖を目覚して、闘いを決意したのは赤旗事件の判決をきいたときであった。彼は天皇制こそ諸悪の根源とみて、何とか学のない人びとも理解できる「天皇、国家ブルジョ

ヨア、兵役、地主の否定論を書きあげた。「入獄記念・無政府共産」である。いうまでもなく（赤旗事件）出獄にたいする大杉らのノ入獄ノをもじり、旗に書かれたノ無政府共産ノをそのまま題としたのである。明治四十二年九月末日、愚童は書き上った原稿をたずさえて東京の幸徳へ逢いに行つた。彼は幸徳に題字揮毫（序文ともいわれている）を頼んだが、内容が禁句の天皇を激しく否定しているのでこれをことわつた。やむなく愚童は森近運平から平民新聞読者の住所をうつし目坊へ帰つた。彼は「無政府共産」を配布すべく、目坊の須弥壇内に秘密の印刷所をもうけ、人知れず活字をひろつて版をくんだ。活字が少ないので一ページずつ作り、漢字のない部分はカタカナ活字で捕なつた。こうして印刷されたものは「無政府共産」のほか「帝国軍人座右之銘」と「道德谷認論」（マクス・バジンスキー著、大石誠之助訳）がある。彼は「無政府共産」を約一千部印刷して平民新聞読者一名簿より全国の同志に送つた。受けとつた人々は、先の幸徳同様、驚きは隠せなかつた。ある者は燃し、またある者は警察に届けて連責を逃れようとした。こうして同年十二月には権力側の入手するところとなり、内務省は発行禁止をすると同時に、発行者を逮捕することを命じた。

翌一月一三日、上京して平民社の幸徳をたずねた。幸徳は愚童に大量の秘密出版は危険であることをとき、直接行動の時期を主張したが、愚童は自分たちが先頭に立てば、後継者がいなくなるこ

とを危惧して伝導を強調したといわれる。結局、幸徳の意見と相対立して、ものわかれに終つた。革命論争ノは具体性を欠くまま愚童は箱根へ帰つた。このころ、愚童の身边にはたえず尾行がつき、逮捕は時間の問題であつた。四月、彼は伝導の爲、関西へ旅立つた。もちろん尾行をともなつてである。神奈川県警は留守中の林泉寺を捜査したところ、秘密出版の器具やタイナイト等を発見、旅先でこの知らせを聞いた愚童は急ぎ箱根へひきかえした。五月二五日、県警は東海道線国府津駅に下車した愚童を待ちかまえて逮捕した。ただちに出版法違反、煽発物取締罪則違反で起訴され獄舎へ送られた。一方宮下太吉は、愚童から送られてきた「無政府共産」の影響を受け、天皇暗殺の具体的な計画を進めていた。明治四十三年五月二十六日、この宮下の検挙を皮切りに権力による一大フレームアップが始まるのである。

既に前記の罪で服役中であつたが、獄中で大逆罪が追起訴され、四四年一月一八日に死刑半決を受けて、同月二五日、三八歳の生涯を死刑台でとじた。

以上が大逆事件における内山愚童のあらましであるが、事件そのものは拡大された人間関係が複雑にからみあい、興味深いものであるが一応本稿の目的ではないので省略して、神崎清氏の「革命伝説」や絲屋寿雄氏の「大逆事件」等の労作にゆずることにする。

さて権力をして「日本開闢以来の悪書」といわしめた「無政府共産」の歴史的な意義は何であったのだろうか。それは原文を読みにくいとも読んでいただければ、おのずと理解できると編者は自負しているところである。

戦後、天皇制論議は嶋中事件等の流動のなかで実質的な検討がされないまま、奇妙な「象徴」が持続され、天皇制を禁句としつつも「こわいものみたさ」のさまざまな天皇論は否定、肯定のイデオロギー的な側面まで空洞化させてしまったような気がする。活字の氾濫は言霊を失ない、身を張るような緊張関係が生まれないシラケは時代風潮のみではなく、たぶん「革命的」と称される売文業者の責任が大なのである。

本書は愚童の顕彰を目的とするものではない。それは「無政府共産」が史上最も要を得た「反天皇論」だからである。「無政府共産」以外の文は、愚童の人間性を知る上で資料として付加したがこのまえがきも含め付録である。

凡 例

- 一、「入獄記念無政府共産」の原本は森長英三郎氏の私蔵のものである。なお原本による言霊を重視するがゆえに判読不可の箇所もそのままとした。
- 一、右著書の現代文は「蚕の社」柏木隆法、鈴木陽一により、旧漢字、仮名遣は原文の意をかえないう程度に修正した。
- 一、「道徳非認論」はマクス・バジンスキー著、大石誠之助訳のものであり、内山愚童が印刷したというだけであるので原文は省き、内容のみ紹介した。但し、漢字はタイプ印刷の都合上、新漢字に改めたが仮名遣とカタカナに付記されている○印は原文のままである。
- 一、書翰は既発表のものを編集、年代順にならべた。出典は数多いため省略する。
- 一、「平凡の目覚」は神崎清氏の好意により「獄中手記」より転載させていただいた。
- 一、「大逆事件と内山愚童」「あとがき」の文責は編者柏木隆法である。

目次

大逆事件と内山愚童	柏木隆法
入獄記念無政府共産(原文)	一
入獄記念無政府共産(現代文)	一六
無政府主義道徳非認論	二七
書翰(年代順 十六通)	三六
「平民新聞」にみる愚童の小論文(二編)	五六
平凡の目覚(獄中遺文)	五七
内山愚童の略歴	七七
あとがき・編集後記	七九